

Viva Arte Vol.3

文化研究講座 ～ 5/10 能楽鑑賞会 ～

みなさん、こんにちは！

文化研究講座をより楽しむために、ちょっとした知識やおすすめの曲を学生の視点からわかりやすく紹介します！
今回は、今年度第三回文化研究講座で、能楽についてご紹介します！

I 能楽とは能と狂言のこと

能は約 600 年前の室町時代に、観阿弥、世阿弥父子によって作り上げられました。能は謡という声楽と舞、そして囃子という器楽から成り立っています。つまり舞踊と音楽と演劇が融合されているという点では、オペラやミュージカルと非常に近い存在だといえます。一方で狂言はセリフを主体としているため、一般的な演劇により近いものです。おもに古典作品を題材にした能に対して、狂言はたくましく生きる中世の庶民の姿を描いた作品が代表的です。また、能は約 20 人の演者によって上演に 1～2 時間はかかるのに対して、狂言は登場人物が 3 人程度で、上演時間も 30 分前後というのが一般的です。

「能楽」という言葉は能と狂言を総称したものです。一見相対するのように感じる能と狂言ですが、同じ舞台上で交互に演じるスタイルを取っています。狂言を演じる狂言方が、能に参加することもあります。このように、両者は互いに影響し合って発展してきました。現在ではユネスコの世界無形文化遺産に指定され、海外からも高い評価を受けています。

II 能の演技空間

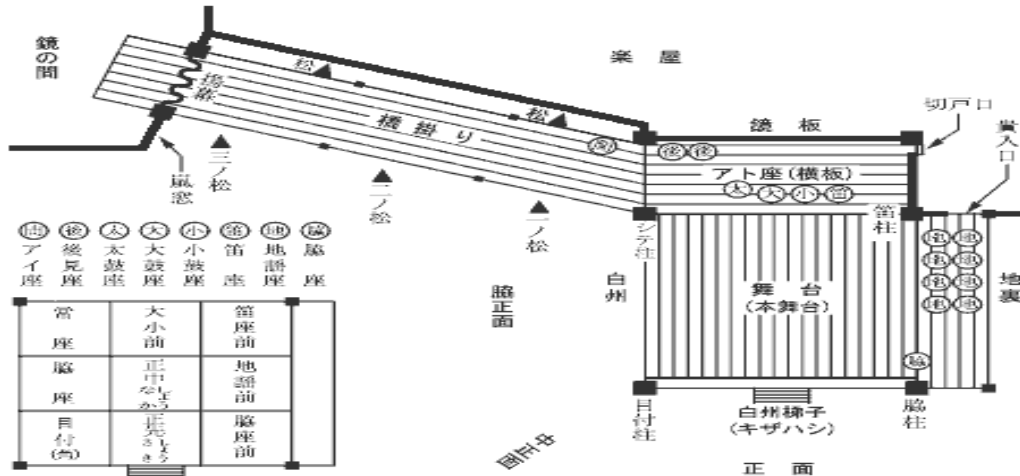
能と狂言は、能舞台という専用の舞台上で演じられます。現在の能楽堂は屋根のついた能舞台が大きな建物の中に入った形になっています。これはかつて屋外で演じられていた名残です。

能舞台は、三間（約 6 メートル）四方の本舞台と後座、地謡座、橋掛りから成る、非常に立体的な空間です。後座には囃子方や後見が座り、地謡座には能のコーラス隊である地謡が座ります。舞台の右奥には後見や地謡などが出入りするための低く小さな切戸口があります。舞台上で殺された役や、仕事の済んだ役が退出するのもこの切戸口からです。

本舞台の中心は、シテの目印でもある 4 本の柱（シテ柱・目付柱・脇柱・笛柱）に囲まれた正方形の部分です。「^{おもて}面」と呼ばれる能面をつけた演者はほとんど前が見えないため、舞台上の 4 本の柱を目印に演じています。

橋掛りは本舞台と鏡の間をつなぐ廊下の役割があります。演者たちは通常、ここを通過して登・退場しますが、単なる通路の役割だけではなく、本舞台と橋掛りを別の世界と捉えたりすることもあります。橋掛のすぐ奥には、大きな鏡

が取り付けられた鏡の間と呼ばれるスペースがあります。装束をつけ終わったシテが鏡の前で集中力を高め、能面をかけることによって主人公になりきるための大切な場所のことを指します。また、鏡の間では囃子方が舞台に出る前に「お調べ」を始めます。これは観客にとって上演開始の合図となっています。



Ⅲ 能舞台を彩る演者たち

シテ方：主役を「シテ」と呼びます。人間だけではなく、神様や亡霊、精霊、化け物などさまざまな役を演じます。そうしたこの世に存在しない役や女性、老人の役を演じる場合は、^{おもて}面をつけます。

ワキ方：シテの相手役を指します。僧や神職、大臣など、現実には生きている男性の役を演じ、面をつけることはありません。

囃子方：囃子を演奏するグループのことです。能において、囃子方は単なる伴奏者ではありません。物語の情景や情緒だけでなく、登場人物の細かな心情の変化を描き出すことが求められるのです。

狂言方：狂言を演じるほか、能では**アイ**（間狂言）と呼ばれる、いわばナレーター役で登場します。多くは前場と後場のあいまに登場し、話の展開を説明したり、ときにはおもしろおかしくストーリーを盛り上げたりします。

後見：作り物の出し入れや、シテの装束の世話をするほか、シテの演技を見守り、何か事故があった場合はシテに変わって舞う責任のある、重要な役を指します。シテの汗を拭いてあげることもあります。

アド：狂言の場合、主人公の相手役を指します

Ⅳ 面をつけることで演者は役に変身する



能では面をかぶるとはいわず、かける、もしくはつけるといいます。実際、下あごが見えるようにつけるため、すっぽりとかぶるといことはありません。「能面のような無表情な顔」という慣用句がありますが、わずかな角度や光の当たり具合、そして演者の演技によって、泣いたり、怒ったり、ほほ笑んだり、無限の表情を見せます。じっく

り観察すると、生き生きとした表情が見えてくるはずですが、^{こおもて}小面は代表的な能面のひとつで、年若い女性の役に用いられます。ふっくらとしており、可憐な印象があります。^{ほんにや}般若は鬼となった女性の顔ですが、怒りと悲しみが混じり合った表情をしています。

V 演目『葵上』について

前シテ…六条御息所の生霊	ワキ… ^{よこかわ こひじり} 横川の <small>小聖</small> (比叡山の僧侶)
後シテ…六条御息所の怨霊	ワキツレ…朱雀院の臣下
ツレ… ^{てるひ みこ} 照日の <small>巫女</small> (梓弓の使い手で口寄せの上手)	アイ…左大臣家の従者

この作品は「源氏物語」をもとに作られています。

物語は、激しい嫉妬心から肉体を遊離した^{ろくじよるのみやすんどころ}六条御息所の生霊が、光源氏の正妻、葵上を襲う悲劇です。

源氏を諦めきれない女心は、やがて葵上への嫉妬心へと形を変え、「^{うわなりのうち}後妻打ち」(注1)という暴力行為へと^{みやすんどころ}御息所を駆り立てます。「葵上」という曲名がついているものの、葵上本人は登場しません。その代わりに、後見が舞台に広げた小袖が、病床の葵上をあらわしています。この作品には、「源氏物語」らしい雰囲気醸し出すための様々な仕掛けが施されています。例えば、御息所が葵上への嫉妬に悩む直接の原因になったのは、賀茂の祭の車争いに破れたことであるという室町時代の解釈を反映して、御息所は前半破れ車にのって登場するという設定になっています。

^{みやすんどころ}御息所は元皇太子妃なので、鬼に変身した彼女は不気味さの中にも品格があらわれています。特に、前場の最後、扇を投げ捨て、着ていた上着を引き被って姿を消す場面では、感情の盛り上がりをいかに表現するかと同時に、高貴さを損なわない動きの美しさが要求されます。

VI 「この辺りの者でございます」

演じられるのが世界のどこであろうが、狂言は「この辺りの者でございます」というセリフから始まります。このセリフに込められた意味とは？

狂言では一般的に、「この辺りの者でござる」という登場人物の自己紹介から始まります。これは、特定の有名人ではなく、その日来ていただいたお客様と同じ目線で舞台がつくられているということや、狂言がいつの時代のどこに暮らす人にも通じる、普遍的なものであることを表している、と狂言師の野村萬齋さんはお話されています。

VI 世界に誇る狂言師、野村萬齋さん

みなさん、一度は彼の名前を耳にしたことがあるのではないのでしょうか。
実は、三軒茶屋に通う私たちにとって、萬齋さんは非常に身近な存在なのです！

野村萬斎さんは狂言和泉流の狂言師として活躍されています。狂言の演出や脚色も務め、現代に生きる狂言師として映画やテレビでも幅広く活躍されています。2001年には初主演映画「陰陽師」が大変な注目を集めました。またNHK教育テレビの「にほんごであそぼ」では、子どもたちに日本語の魅力を伝えるために、狂言の「型」を通して言葉と身体表現を組み合わせ、様々な名文やことわざなどで分かりやすく表現してくださいました。2007年からは、世田谷パブリックシアターの芸術監督として活躍されています。

(注1) 後妻打ち

夫に追い出された先妻が後妻に対しての恨みを晴らすため襲撃する、日本の古い風習のひとつ。

これには「先妻は事前に後妻に対して襲撃する日時を予告する」「後妻宅の家財道具は壊しても良いが、後妻本人に怪我をさせてはならない」「夫は先妻、後妻のどちら側の応援をしてもならず、ただじっと見ているだけで、手出ししてはいけない」などの決まりがあった。

いかがでしたでしょうか？

ご意見・ご感想、リクエスト等ありましたら、

viva_arte_2010@yahoo.co.jp にメールください！！

お待ちしております♪

担当：現代教養学科 3年 Viva Arte 編集部

<参考文献一覧>

石井倫子 『能・狂言の基礎知識』（株式会社角川学芸出版、2009年）

横浜能楽堂企画 山崎有一郎監修 『能楽入門①「初めての能・狂言」』（株式会社小学館、1999年）

体験学習用テキスト 『たのしもう 能と狂言』 制作：国立能楽堂

竹本幹夫・橋本朝生 編 『別冊國文學・No.48 能・狂言必携』（學燈社 1995年）

金関 猛 『能と精神分析』（平凡社 1999年）

久保田慶一 ほか 『はじめての音楽史』（音楽之友社、2005年）

白洲正子 吉越立雄 『お能の見方』（新潮社、1993年）

the能.com 演目事典 <http://www.the-noh.com/jp/index.html>（閲覧日：5月1日）

Yahoo!百科事典「狂言」（閲覧日：2010年5月3日）

<http://100.yahoo.co.jp/detail/%E7%8B%82%E8%A8%80/>

能楽協会ホームページ <http://www.nohgaku.or.jp/encyclopedia/whats/stage.html>（閲覧日：5月7日）

